

橋本遊廓の遊客と娼妓 — 遊客帳の分析から —

竹 中 友里代

目次

はじめに

1. 第二友栄楼と遊廓資料

(1) 第二友栄楼と楼主家族

(2) 資料の目録と概要

○遊客帳 ○家計日誌 ○従業員名簿 ○台物控 ○遊客宛て領収書控帳

○娼妓別売上・借金等稼業帳

2. 遊客帳の分析

(1) 橋本遊廓の発展

(2) 遊客の居住地

(3) 遊客の職業構成

(4) 遊客の年齢構成

(5) 大阪・京都の遊所の花代

(6) 娼妓の労働状況

3. 家計日誌と遊廓経営

(1) 楼主による娼妓発掘の記録

(2) 娼妓の入退院と娼妓の慰安

おわりに

はじめに

橋本遊廓は、京都府八幡市、京阪橋本駅の西側にあり、近代公娼制度下の最盛期には86軒の貸座敷を数える洛南随一の花街であった。昭和5年刊の『全国遊廓案内』や『日本花街史』⁽¹⁾でも山城八幡の遊廓として知られていた。明治元年戊辰の戦禍で衰退した橋本を復興するために、明治10年には地元で遊廓の設置が懸案とされ、明治20年貸座敷・芸妓・娼妓・引手茶屋・紹介業の五業組合が組織され、中ノ町20番地に事務所、検徴場を設置して京都府知事の認可を受ける。橋本遊廓については、『八幡市誌』で数頁にわたって触れ、さらに守屋氏は、市誌編纂や自身の収集資料をもとに、芸妓税増税反対運動や娼妓の自由廃業を訴えた新聞記事を交えて、遊廓の背後にある社会情勢に位置付けて概説している⁽²⁾。その後は京都府近代和風建築調査で、橋本の

町並みが紹介されている⁽³⁾。

2020 年京阪橋本駅周辺再開発事業によって、橋本駅前にある橋本焼野 1 番地の旧橋本遊廓歌舞練場が解体撤去され、同敷地内の養神碑も移設された。大正 11 年に上棟された旧歌舞練場は、1 階は百人以上が入る観覧席に壁側を取り巻くように二階席があり、遊廓の繁栄を象徴し、対岸の大山崎からも目視できる大型の建物であった。昭和 12 年遊廓 50 年を記念して設置された養神碑は、妙心寺管長の神月徹宗の揮毫であった。この再開発を機に地元以外でも橋本遊廓の保存が注目されるようになる。遊廓の建物が残るレトロな町としてネット上でも紹介される一方で、近年は、高齢化や世代交代で、旧遊廓の建物が解体され、新築住宅に変貌しつつある。新住民には遊廓の建物を治療院やカフェなどで再利用しながら保存する動きがあり、建物内部の整理中に遊廓時代の第二友栄楼の資料に遭遇した⁽⁴⁾。

近代京都の遊廓研究については、横田氏による京都市内の宮川町・七条新地・島原の「遊客人名帳」を素材に各遊廓の芸娼妓の揚げ代・客数などから、市内各遊廓の性格や娼妓の労働状況を分析している。近年は京都の基幹産業のひとつ繊維業界と祇園遊所との関係を位置づけた瀧本氏の論考がある⁽⁵⁾。高木氏には金光教の布教活動は、遊廓で働く娼妓や楼主に対して正当な分業として自らの職業に誇りを持ち、労働者として生きる意義を説いた労作がある⁽⁶⁾。地理学会でも遊客帳そのものを取り上げ、大正期宮川町の遊客帳の記載事項から、買い手側の遊客を分析対象とし、年齢・職業・居住地の空間的特性を明らかにした⁽⁷⁾。抑圧的な遊廓の歴史的構造から、近代においては公娼制度下で、自由意志の名のもとに性売買が再編され、売る側の娼妓の悲惨な状況を論じる研究に対して、性を買う側や楼主に言及したものは少ない⁽⁸⁾。本稿では橋本の娼妓の性売買の実態を分析しつつ、橋本を利用する遊客の社会構造、楼主家族の様相と経営実態を明らかにする。なお、話者や資料の表記に従い、本稿では元号を用いる。

1. 第二友栄楼と遊廓資料

(1) 第二友栄楼と楼主家族

大阪松島遊廓出身の姉妹、長女は松島の本家遊廓を、二女・三女が八幡の橋本遊廓へ進出し、姉が第一友栄楼、妹の三女が第二友栄楼を経営した。第二友栄楼の建物は、通りに面した玄関とは別に、1 階洗面所の奥に地下室への階段があり、そこから裏の尾無瀬川（大谷川）への出入口がある。地下室新築の許可が昭和 4 年に出され、3 階の屋根裏には上棟の御幣があり、「昭和四年十月五日大工棟梁伊藤松次郎・手伝長村勝治」とある。よってこの建物は昭和 4 年に建てられたと考える⁽⁹⁾。この時友栄楼として新築されたかどうか明らかなではないが、家計日誌から昭和 10 年には友栄楼は娼妓を数名抱える貸座敷で、昭和 16 年に亡くなるまで三女が経営を切り盛りしていた。

第二友栄楼には大正 2 年生まれの一娘があり、大阪市大正区の泉尾高等女学校に入学、娘の養育期は松島で生活していた。昭和 6 年北河内郡守口町にある帝国女子薬学専門学校に入学、角帽姿の女学生が橋本遊廓から通学していたという。昭和 10 年卒業、同年薬剤師免許を取得する。

伏見区の外科病院に薬剤師として勤務、大阪市で教員を勤めていた夫を養子に迎え、昭和 15 年頃に楼主を引き継いだ。

第一友栄楼の長男も大正 2 年生まれで薬剤師となり、松島遊廓の本家近くで薬局を開業していたという。日記からも松島遊廓の三人の姉妹とその家族は、大阪の百貨店で買い物を毎月の寺社参拝など日常的にも付き合いが濃厚であった。

第二友栄楼の建物の玄関には、名所図会などでも淀の風景として知られた淀城と水車に、淀川で京大阪を往来する帆掛船が京へ遡上する時に、人足が船を曳航する様子の彫刻欄間をはめ込む。二階にも淀を象徴する千両松原や波の彫物を配している。彫刻欄間を外部に見せる意匠は、橋本遊廓の特徴であり鯉や千鳥の彫物が多いなか古風な風情である。

玄関を入り右に「張見世」があり 1 階奥は楼主家族の住まいである。玄関を上がりすぐに右手に Y 階段があり、2 階は 4.5 帖の和室が 6 室に、6 帖の和室・洋室に 3 帖間などがある。階段上の柱に産児調節・性病予防サックの自動販売機が設置されている（図版 第二友栄楼見取図・資料 118 頁）。

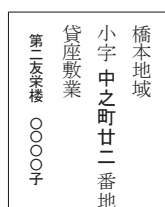
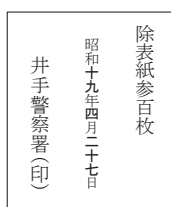
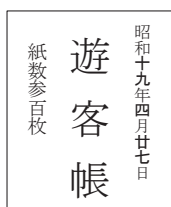
(2) 資料の目録と概要

2021 年 2 月に確認した第二友栄楼の資料 21 点は、帳面や紐で綴られたものに番号を付与し、巻末 119 頁〔表 1〕政倉莉佳所蔵資料目録に整理した。概要について以下に述べる。

○遊客帳

No.1～4 の遊客帳は、橋本遊廓第二友栄楼に登楼した客の情報を記録した遊客名簿である。No. 1 は、表表紙・裏表紙ともに欠損しているが、No.2～4 の表の表紙には、「昭和 年 月 日／遊客帳／紙数参百枚」と一見筆で書したような立派な楷書体であるが、よくみるとあらかじめ印刷されている。表紙をめくると「除表紙参百枚／昭和 年 月 日／井手警察署（印）」とあり、警察署の朱の角印がある。No.3・4 には、角印の上から「消」の楕円形の黒印が押されている。この消印は、No.2～4 の小口等にもある。

裏表紙には、「橋本地域／小字 番地／貸座敷業」と表紙同様に筆書のような楷書体で印刷されている。橋本遊廓は、小字中ノ町と小金川・焼野にあり、小字の下に町名と番地が記入できる。次に貸座敷業とあり、その左の最後の行に妓楼名と楼主の名前が書き込めるように空白がある。No.3 と 4 は、「貸座敷」に上から紙が貼られ「業」だけが見え、昭和 19 年に業種名の変更があったのか理由は不明である。下の小口には「第二友栄楼 自昭和 14 年 12 月 26 日」とあり、和綴本と同様に平積みで保管されていたと思われる。



記録の欄は、1頁2名、裏表に印刷され、見開きで客4名が記録できる。登・下楼した年月日時分に、住所・氏名・職業に身長（尺寸）を記入する。ほかには、花・泊、一現・馴染、体質（肥・中肉・瘦）、顔（丸・長・面長・平・角型）、肌色（白・蒼白・赤・黒・浅黒）、鼻（高・並・低・獅子）、髪（長髪・短髪・丸刈・禿・薄）、服装（作業服・制服・洋服・和服・厚司・ハッピー・ジャンパー服）、履物（地下足袋・靴・高低下駄・ハツ割草履）の9項目に、いずれかを選択し、赤点が付けられている。客の風貌が直に特定できるようかなり詳細であるが、簡易に選択できるようになっている。その下部には、客が消費した金額・客の年齢・接待した娼妓名に仲居名を記入する欄がある。

仲居とは、橋本では「ひっこ」と呼ばれ、客が娼妓を指名する時に仲を取り持つ役である。客は娼妓と直接掛け合うことはなく、「ひっこ」は店の暖簾の内側から客に声を掛け、交渉が成立したら娼妓の部屋まで案内する。遊廓には住まず、通いのパート労働者で郷里へ帰ることが出来なくなった老女や寡婦等が働いていたという。遊廓での女性労働の一形態でもある。

No.3の昭和20年4月7・8日の欄外には「昭和20（もしくは21カ）年1月2日検ス布施警察署捜査本部」とあり、No.4の裏表紙の裏には「昭和三十一年一月十二日検ス／大阪府布施署捜査本部」、「昭和20.12.14兵庫県刑事課西村」と昭和20年10月5日の欄外に書き込みがある。これら遊客名簿が警察の犯罪捜査に利用されていたことを示している。

No.5は表紙には「自昭和拾 年 月 日／至昭和拾 年 月 日」と活字で印刷され、中央に「外人遊客帳」と手書きの貼紙があり、昭和20年10月26日から記録している。表紙をめくった次頁の中央に「京都府井手警察署」の朱角印がある。裏表紙の中央に、「橋本遊廓 楼」とあらかじめ活字印刷され、「第二友栄」の妓楼名を記入している。

記録欄は、1頁に上下二段に二日分が記入でき、妓名・登楼時間、金額、係仲居の4項目が縦に11記入できるよう罫線で仕切られている。記入の内容は、娼妓名に登・下楼時間、金額に加えて、従来の遊客帳に倣ってか、客の名前、現住所、年齢を12月3日までの5丁に24名のカタカナの外人名が記されている。住所には、進駐軍に接収された大阪商科大学内や436通信隊、456戦車隊のように所属部隊を記している。終戦直後も通常通り営業し、昭和21年1月連合軍総司令部（GHQ）により、公娼を容認する一切の法規の撤廃方針が発表されるまで、アメリカ駐留軍関係者を遊客として受け入れた記録である。

○家計日誌

昭和10年から昭和14年までの家計簿（No.6～10）5冊は、非売品で取引のある顧客向けの大阪貯蓄銀行の年末の粗品として配布されたものである。一年間の毎日の金銭出入納欄の上部に自由記述欄があり、日記としても併用されているのは現在の家計簿と同様である。内容については後述する。

○従業員名簿

No.11 は表紙に「従業員名簿」と印刷され、その下に「八幡町警察署」の朱角印がある。「第二友栄」とペン書きされ、黒の綴じ紐で綴られている。はじめの2丁には、年月日と氏名の欄があり、昭和23年12月20日から昭和26年9月9日まで19回の点検、点検者欄に石村・西元・前田などの個人の印があり、警察署担当者の点検を受けていた。その後の頁には従業員の本籍地(現住所)・通称(源氏名)・氏名・生年月日・従前職業・就業年月日・略歴の記入欄がある。従業員は、近くは大阪市南区・天王寺区の2名、姫路市2名、長崎県諫早市2名、宮崎県の本籍地で現住所は熊本県球磨郡久米村から2名、高知県香美郡赤岡町から1名、合わせて9名の記録が綴られている。昭和5年の『全国遊廓案内』にも「橋本遊廓の娼妓は、中国・四国・九州方面からが多い」という。就業年月日が昭和25年8月12日から昭和26年10月25日まで、生年から換算すると就業した時の年齢は、18歳から22歳である。前職は、9名中6名が接客婦・飲食店女給などのサービス業経験者で、家事手伝・女中・事務員の各1名である。

各娼妓の経歴をおってみる。通称「まり子」は、本籍地は宮崎県田島町、現住所は熊本県球磨郡久米村で昭和26年10月25日の同日に就業した初子と現住所が同じで、ふたり一緒に橋本へやってきた。まり子は人吉小学校卒業後、福岡県南郷村で女中になり、人吉市で飲食店の女中を勤めていた。同郷で4歳年上の初子は宮崎市内で酌婦をしていたが、人吉市で接客婦となっている。まり子は、人吉市で初子と出会い、ともに八幡の橋本へ自活のために娼妓となる。二人とも母子家庭で母親が戸主である。

「まさ子」は、昭和7年に生まれ高知県の小学校卒業後、すぐに奈良へ接客婦として奉公に出されるが、この時はまだ幼く下働き・見習いであろう。その後石川県大聖寺町遊廓の大国屋へ転じ、橋本での就業の昭和26年は19歳であった。

大阪南区出身の「みどり」は、昭和5年生まれで小学校卒業後は大阪タイピスト女学校に入学するも中途退学し、終戦直後15歳で大阪預金支局に勤務する事務員であった。家事手伝から性労働に至る真の理由は明らかではないが、自活のために昭和25年9月に20歳で橋本の娼妓となる。「みどり」の経歴欄には、26年3月16日廃業、3月24日就業、5月31日廃業、6月14日就業、6月24日廃業、7月5日就業と5ヶ月足らずの間に6回の就・廃業が記録されている。繰り返される就業と廃業は、前借金に縛られ就労を余儀なくされるが、逃亡や接客拒否などの忌避行為で接客をしなかったことを廃業と記したものか。

もう一人大阪出身「陽子」は、昭和5年大阪天王寺区に生まれで阿部野小学校高等科を卒業後、大阪アルミ日本製作所に勤務、和歌山市の天王新地で接客婦となる。その後大阪のスタンドバーに女給となるが昭和26年5月21日に橋本で娼妓として就業する。21歳であった。その後5月25日に廃業、6月2日に就業、6月6日に廃業と記録する。

「美代子」は昭和4年長崎県諫早市に生れ、終戦後に橋本遊廓の第一友栄楼で娼妓となり、昭和26年に22歳で第二友栄楼に転居し、引き続き接客婦をしている。

従業員名簿に記された9名の記録は、各地の接客関係や遊廓を経て橋本へ流れ着いたものが多かったが、自活のためと称して事務員や会社勤めの女性が、遊廓で働くことを選択するも、就業・

廃業を繰り返していた。戦後民主化を標榜する流れの中でもなお遊廓は事実上存続し、依然警察署の管轄下にあった。終戦後、厳しい女性労働市場の記録でもある。

○台物控

No.12の帳面は、昭和14年4月1日から昭和16年1月2日までを記録する。

日付毎に、娼妓名と金額と注文した料理や酒の数量が記されている。遊廓では調理した料理は出さないが、客の注文があれば近くの料理屋から出前・仕出しを届けさせた。おもに井物・志那蕎麦・すしにビール・酒である。昭和14年の遊客帳の娼妓名と突き合わせると、泊りなどの長時間滞在客が料理や酒を注文し、娼妓も出前のすしや井物の相伴にあずかっている。

○各娼妓売上帳

No.13は表紙の表・裏共に欠失し、年紀は不明だが、可祝・福丸・美子・玉勇・市奴の五名の娼妓を日付ごとに集計し、記号で記録している。「+」は10、「五」5、例えば6月12日 可祝「+」が5個で五〇とあり、同日福丸「+」6個と「五」1つが記され六五とある。可祝と福丸が稼いだ花代であろうか。昭和15年2月に美津葉が廃業し、同年4月までの遊客帳には美子は登場しない。昭和19年には娼妓は3名である。このことから昭和15年5月以降、同18年頃までのものか。

○遊客宛て領収書控帳

No.14は京阪沿線橋本第貳友栄楼から御旦那様宛、金額と昭和 年 月 日が既に印刷された冊子である。右側は切り離して相手方に渡せるようミシン目がある。綴じられた控が70枚程ある。控え部分は金額の他に、ビール・酒・すし・付き出し・さしみ・井物・めし・赤だし等の料理からみつ豆・スイカ・果物のデザート類や相手の娼妓名が記されている。日付は昭和12年4月23日から昭和16年5月12日まで確認できる。例えば昭和15年1月9日の控えには、「5円50銭」の下に「酒四・さかな二・志那そば四、井二」と明細があり、相方に「市奴」と記され、ミシン目に割印がある。遊客帳にはこの日は市奴に22時20分から翌朝7時までの泊り客が7円支払っている。また昭和15年2月23日には、12円30銭、汁4・酒8・さかな7・井5・かもなんばとあり、相手は可祝・福丸・市奴とある。No.12の台物控の同日にも「さけ・さかな・赤だし・井などが記されほぼ一致する。この日大阪港区から職工3名が19時30分から翌日の昼まで、それぞれ可祝・福丸・市奴を相手に各10円を支払っている。これは花代とは別途に客が支払った飲食代金の領収書の控えである。

○娼妓別売上・借金等稼業帳

No.15～21は、いずれも表紙を含む前半部分の数頁分が切り取られている。年月日・金額・使用種目・稼人印の4項目が罫線で仕切れ、各丁の柱に「橋本貸座敷組合」と印刷され、橋本

の地域共通の書式であった。6冊のうち欠失部分が少なく保存状態が比較的良好な No.15 の最初の部分に、「本簿記載事項」として次の12項目を掲げている。

- 一 登録年月日
- 二 稼業期間
- 三 前借金
- 四 稼業ニ基ク疾病ニヨリ入院又ハ休業シタル年月日並日数
- 五 前号以外ノ疾病又ハ施行其ノ他ノ事由ニヨリ休業シタル年月日並日数
- 六 医療費トシテ抱主及娼妓ノ支出シタル金高
- 七 別借金ノ金額、年月日、用途
- 八 各月稼高ニ対スル賞与金額及其収入支出
- 九 公休日稼業ニ従事シタル場合稼ぎ揚高
- 十 稼業全期間ニ対スル賞与金額
- 十一 賠償金
- 十二 違約期間内ニ於ケル残金ノ利子金

次頁の欄外に「京都府井手警察署」の検印があり、「昭和拾一年拾月五日、四拾円拾六銭、立本医院永原病院治療費半額」とあり、橋本の立本医院や伏見の病院の治療費、灸鍼・貼薬等の代金が記録され、金額には半額分が記載されていた。六の項目に該当し、治療にかかった費用の半額が娼妓負担であり、警察の点検を受けていた。他には化粧品・タオルなどの日々娼妓が消費した金額が書き込まれる頁があり、七の別借金に組み込まれるのであろう。昭和12年2月の箇所には、花代など合わせて5円20銭の娼妓の収入に対して、化粧品代1円50銭と50銭のコシマキ購入代、合わせて2円の消費があり、これを差引いて、2月5日に3円20銭が本人に手渡されている。

各項目の最下段・稼人印の欄には「村上」・「大西」・「小森」などの個人の印がある。娼妓の認め印で、支出額を確認して押印したものであろう。算出の仕方は不明であるが、売上花数・賞与・化粧料などを合計した稼ぎ金から娼妓が支払う額を差引いた金額が毎月5日に本人に渡される。つまり娼妓のその月の実収入となる。こうした娼妓ひとりひとりの情報が1冊にまとめられている。なお巻末の「入所並休業表」には、検査所への入退院の年月日・治療日数が記されている。

No.15 には、一の登録年月日に昭和10年12月5日、三には前借金800円とあり、No.6の家計日誌をみると同日に熊本から来た玉勇が井手警察署に登録している。

No.17 には「警察署ノ承認ヲ受クベキ別借金」の項目に日付・金額に「父母病氣ノ為送金ス」として昭和12年に75円、同13年に80円、同14年45円と借金が追加され、それぞれ朱書きで「右金額承認ス」として井手警察署の検印がある。借金が増えるたびに警察という公権力の承認は、稼ぎ金の不当な搾取に疑問を持ったとしても、娼妓には借金返済から逃れられない抑圧感を与え

ていただろう。

2. 遊客帳の分析

(1) 橋本遊廓の発展

昭和 12 年に橋本遊廓 50 周年を記念して発行した『橋本遊廓沿革誌』⁽¹⁰⁾に記述される貸座敷数・芸妓・娼妓数を〔表 2〕にまとめた。

〔表 2〕橋本遊廓の貸座敷・芸妓・娼妓数

	明治 20 年	明治 30 年	明治 33 年	明治 40 年	大正 11 年	昭和 4 年	昭和 12 年
西暦	1887	1897	1900	1907	1922	1929	1937
貸座敷数	7	13	13	21	46	74	86
芸妓	9	10	11	16	60	33	3
娼妓	9	23	39	30	127	373	675

遊廓として認可を得た明治 20 年には貸座敷 7 件、芸妓 9 名、娼妓 9 名、20 年を経た明治 40 年には貸座敷・娼妓共におよそ 3 倍に増加している。大正 11 年にはその 2 倍の 46 軒、娼妓は 4 倍に、昭和 12 年には、81 名 86 軒を数え、娼妓数は 675 名に達し、橋本遊廓は次第に活況を呈し始めていた。

ここで芸妓についてみると、それまで微増であった明治 40 年の 16 名から大正 11 年には 60 名と大幅に増加している。明治 40 年には貸座敷 1 軒当たりの芸妓は 0.8 人であったが、大正 11 年には 1.3 人、その後は芸妓の割合は減少している。

石清水八幡宮が鎮座する男山をめぐる景観は、明治 31 年に架橋された八幡御幸橋や、谷崎潤一郎の『蘆刈』に描かれる橋本の渡しなど、淀川と男山を背景に風光明媚な地として知られていた。京阪電車が明治 43 年に開通し、石清水八幡宮への参詣の玄関口である八幡の駅前には、旅館や飲食店から歌舞音曲の音が絶え間なく賑わっていた⁽¹¹⁾。その隣の橋本駅は、淀川・桂川・宇治川の三川が合流し、「風景よく、夏は涼しく、多数の網船が出漁して川岸に弦歌のさんざめく辺りは実に別世界の感じがする。」と紹介され、京・大阪の中間に位置し、橋本遊廓は近年めきめきと繁昌していた。橋本は、石清水の由緒と風情ある景観のなかで参詣や観光客を芸妓がもてなす遊所であった。さらなる遊廓の発展をもくろみ、経費 10 万円を投じて、料理部を備えた「歌舞練場兼芸娼妓慰安余興場」、取り壊された旧歌舞練場を新築したのが、芸妓 60 名を数えた大正 11 年であった。

ところが、〔表 2〕にあるように、昭和 12 年には芸妓は 3 名と激減し、それに対して娼妓は 675 人と急激に増加して、売春に特化していくのである。昭和 2 年金融恐慌、昭和 4 年世界恐慌へ発展し、我が国の農村経済の疲弊は、困窮のために身売りする娼妓の爆発的増加をもたらした⁽¹²⁾。急増した娼妓に合わせて遊客も増加し、橋本の通りは、「男川」と呼ばれるほどに遊客が流れるように本通りにあふれていたという。この遊客はどこから来て、どのような階層の人々であったのか次に遊客帳のデータから分析する。

(2) 遊客の居住地

昭和 14 年 No.1 は毎月 1 日が、昭和 19 年から 20 年の No.2 ～ 4 は毎月 22 日が公休日である。前日からの泊り客を見送ると、月に一度はその日は昼夜娼妓たちは客をとらない日であった。なお昭和 20 年 8 月 15 日終戦の玉音放送があった日は休業しているが、その後遊客帳の記録がある 10 月まで通常通り営業している。

No.1 から 4 の各帳面の営業日数から、一日平均の第二友栄楼利用客数を〔表 3〕にした。

〔表 3〕 遊客帳別記載期間・営業日数・一日平均客数

No.	記載期間	営業日数	一日当り客数
1	昭和 14 年 12 月 26 日～昭和 15 年 4 月 19 日	113	10.44
2	昭和 19 年 4 月 27 日～昭和 19 年 10 月 7 日	159	7.55
3	昭和 19 年 10 月 7 日～昭和 20 年 4 月 8 日	178	6.74
4	昭和 20 年 4 月 7 日～昭和 20 年 10 月 5 日	174	6.9

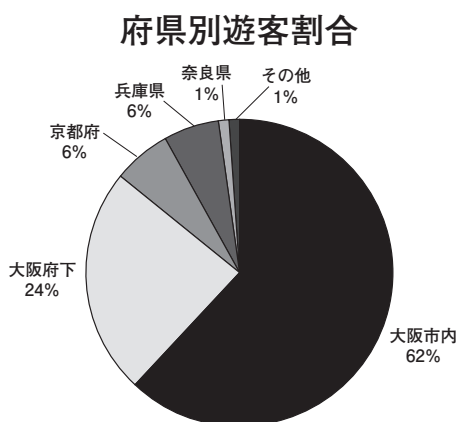
昭和 14 年～ 15 年にかけて最も多く、娼妓 5 人で 1 日 2 人以上の接客である。昭和 19 年以降は戦局が客数に反映してか、終戦の年にかけて減少傾向であるが、娼妓 3 名で 1 日 2 人以上の接客状況は変わらない。

次に昭和 14 年 12 月 26 日から翌 15 年 4 月 19 日までの No.1 の遊客帳の記載内容を、日付、登・下楼時間、客の年齢・住所・職業、接客娼妓・消費金額等のデータを入力した。なお 1 冊の紙数 300 枚で、全体のデータ数は 1180 であるので、前後 5 枚が欠失している。

まず客の現住所から府県別に分類したのが〔表 4〕である。

〔表 4〕 府県別客割合

各地域	客数	割合
大阪市内	730	62%
大阪府下	285	24%
京都府	67	6%
兵庫県	72	6%
奈良県	8	0.1%
その他	18	0.2%
合計	1180	



大阪については大阪市内と府下で分けている。大阪市内から 730 名で全体の 62%、大阪府下 285 名 24%、合わせて大阪が 86%である。京都より兵庫県が若干多いが、いずれも 6%にとどまっ

ている。橋本遊廓は圧倒的に大阪からの客で占められていた。

さらに遊客を〔表5〕で、市内の区別・府下の郡別に分類し、宿泊の割合を出した。

〔表5〕 遊客居住地別人数・泊り客数

		客数	泊り客数	宿泊の割合
大阪市内	旭区	149	56	38%
	北区	119	39	33%
	東成区	79	29	37%
	東淀川区	72	24	33%
	港区	69	35	51%
	東区	48	19	40%
	此花区	46	27	59%
	西淀川区	40	15	38%
	住吉区	28	15	54%
	大正区	24	12	50%
	西区	13	5	38%
	浪速区	15	7	47%
	天王寺区	11	3	27%
	西成区	9	1	11%
	南区	8	3	38%
	小計	730	290	40%
大阪府下	三島郡	62	8	13%
	北河内郡	170	49	29%
	南河内郡	5	1	20%
	中河内郡	34	7	21%
	その他大阪府下	14	3	21%
	小計	285	78	27%
京都	京都市	25	1	4%
	京都府下	42	10	24%
	小計	67	11	16%
他県ほか	兵庫県	72	24	33%
	奈良県	8	4	50%
	岡山・名古屋・滋賀ほか	14	6	43%
	不明	4	1	25%
	小計	98	35	36%
	合計	1180	403	34%

客数は北河内郡が最も多く、八幡市に隣接する枚方市や寝屋川市・守口市・門真市・交野市など大阪の北部で距離的にも近い。大阪市内では旭区・北区は、淀川の左岸の京阪沿線で、橋本まで至便な地域が上位を占めている。東淀川区・西淀川区や府下の三島郡や兵庫県は、淀川の対岸にあり、昭和5年に架橋した枚方大橋を渡り京阪電車で橋本に至る。また新京阪鉄道（現阪急電鉄）や国鉄を利用し、大山崎から渡し舟で橋本に至るルートも想定でき、交通の便が客数に反映している。

京都市内は25人の内6人が伏見区、下京区5人である。伏見区は八幡からも京阪電車で1・2駅の距離で、八幡から日常の買い物や医者等に伏見の商店街が利用され、もっとも身近な繁華街もある。

遊客数に対する宿泊の割合は、此花区・住吉区・港区・大正区・浪速区が多く、大阪市内でも港湾に面し、京阪電車利用でもいくつかの乗り換えが必要である。奈良県や他府県からの客は宿泊する割合は高い。

（3）遊客の職業構成

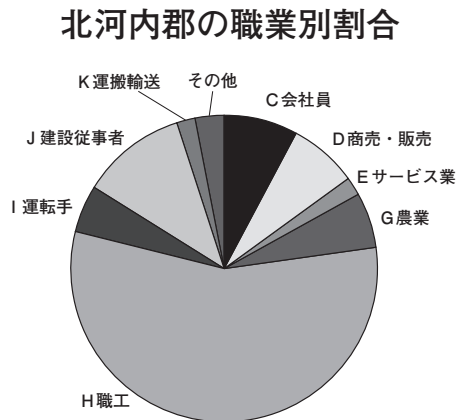
橋本を訪れた遊客はどのような職業が多いのか、分類項目は総務省の「日本標準職業分類」⁽¹³⁾の大分類AからKに当てはめた。Aは会社や商店の主人・組織の管理的な責任者、Bは技能職で教員や官吏や技術職、Cは一般の事務を行う会社員・従業員、Dは商店や物に関わらず販売に従事する者、Eはサービス業で、食堂・飲食店・理髪業・洋服仕立等、Fは保安職業従事者で、軍

人や警察官・消防署職員等、Gは農業生産者、Hは重・軽のいずれの工業に関わらず、生産工程を担う職人、工員を当てはめた。Iは輸送機械運転従事者としてタクシーなどの車の運転手、Jは建築・採掘事業者で大工・左官・電気配線工・土木作業員に建物内の設備・装飾を施す電気配線工や指物師なども含めた。Kは物資の運搬に関わり、郵便や鉄道・船舶関係者である。

職業欄に記載したものが分類に確かにあてはまるか、判じ難いものが多い。例えば「鉄工」「鉄工所」とあるが、鉄工所で働く職工か或いは鉄工所経営者かもしれないが、職工として分類している。不分明なものもかなりあるが、客層の大枠を知る目安になる。

〔表 6〕北河内郡の職業別割合

職業分類	客数	割合
A 管理職	0	0%
B 専門職・技術職	0	0%
C 会社員	13	8%
D 商売・販売	12	7%
E サービス業	3	2%
F 警察・軍人	0	0%
G 農業	11	6%
H 職工	96	56%
I 運転手	8	5%
J 建設従事者	18	11%
K 運搬輸送	4	2%
その他	5	3%
合計	170	



地域別の遊客が最も多い北河内郡の職業別の割合〔表 6〕では、A の管理職、B 専門職技術職、F の警察・軍人はなく、H の職工が 56% で最も多い。

職工には、工員・職工とだけ記す他に鉄工や溶接・旋盤工が 40 人含まれる。次に建築 11%、C 会社員、D 販売、G 農業、I 運転手と二位以下はほぼ同列である。

職工の中には、枚方からの職工が 39 人そのうち工廠の工員 3 名が馴染で 14 回登楼している。同工廠からであろう客がほかにも数名あり、陸軍関連の工場で働く工員の客が多くあった。枚方には明治時代から禁野火薬庫が設立され、日中戦争後は、「陸軍造兵廠大阪工廠枚方製造所」が昭和 13 年に開設され、軍需関連施設が建設されていた。また鉄工関係は 20 人、鉄線が 4 人、他に守口の松下電器の工員・マシンやメリヤス工場の工員がある。

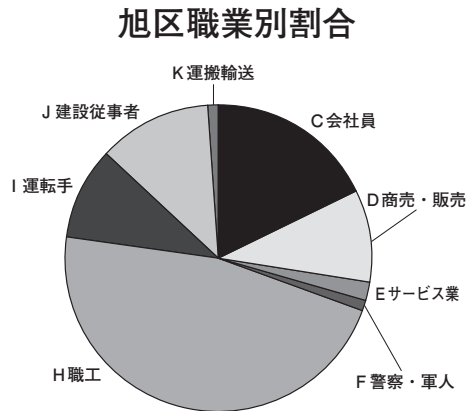
大阪郡部では大消費地をひかえ農業に専業化した都市型農業生産地域であったが、その一方で枚方町・蹛陀村や牧野村など京阪電車の沿線地域では、都市部への賃労働者が多い。北河内郡内の通勤者の職業は職工が 3 割に上り、北河内では、軍需施設とその関連工場、大阪市内へ通勤する工場労働者が遊客の半数以上を占めていた⁽¹⁴⁾。

次に大阪市内でもっとも客が多い旭区〔表 7〕を見る。A の管理職や B の専門職・技術職がないのは北河内郡と同様であるが、都市の中心部で農業従事者はない。ここでも H 職工や工員が最も多く 48% である。職工には鉄工関係が 23 人でもっとも多く、ガラス工 5 人、鋳物・鍛冶 3 人

である。特徴的なのがメリヤス工場の仕立工が 9 人あり、大阪北部の当時の工業分布が反映している。次いで会社員 18%、建築が 12%、運転手と販売業がともに 9%である。ここでも圧倒的に工場労働者が多い。

〔表 7〕 旭区職業別割合

職業分類	客数	割合
A 管理職	0	0
B 専門職・技術職	0	0
C 会社員	26	18%
D 商売・販売	15	10%
E サービス業	3	2%
F 警察・軍人	1	1%
G 農業	0	0%
H 職工	70	47%
I 運転手	14	10%
J 建設従事者	18	12%
K 運搬輸送	1	1%
合計	148	



大阪市内全体で集計しても H の職工が 40% で、次に C 会社員と D の商売が 13% で、運転手 10% で、大阪府全体の客層の傾向は同様である。職工には、鉄工、メリヤス仕立工に特徴がある。

大阪については、明治後期には巨大企業と関係しつつ中小工場が集積され、大阪の地域社会を形成していた。従業員 1500 人を抱える安治川北の大阪鉄工所は、関連業種として機械製造・鉄工・造船・ガラスなどの製造業が技能職工の人的ネットワークを形成して、技術的に自立した鉄工職人の中小工場が集積されていた⁽¹⁵⁾。

メリヤス製品は、軍や学生・公務員の都市上層民向けの靴下・手袋などの需要に限られていたが、次第に肌着などが中国や東南アジアへの輸出品へ発展していた。メリヤス製造機についてもそれまで大資本が扱う輸入品の高額なメリヤス製造機械を導入して、都市の低賃金労働者が雇用されていた。いっぽう自力で技術導入して、国産の安価なメリヤス製造機を開発・改良した中小のメリヤス製造業者が増加し、生産増大して輸出品を担っていた。国産機械は、部品を木製品や安価な素材で作り、消耗品のメリヤス針も国産製造を成功させるなど製造部品の調達は、関連零細工場の分業に支えられていた⁽¹⁶⁾。

第一次大戦の好景気によって、大阪の中小工場集積の産業構造は、市内周辺や近隣地域へ拡大せしめていた。その後、金融恐慌・昭和恐慌を経て、日中戦争の全面拡大と長期化、昭和 13 年国家総動員法による戦時下統制経済へと進み、軍事・軍需の産業が優先され、重化学工業へと傾斜していった。この遊客帳の客は、鉄工関連の中小工場や軍事関連施設で働き、大阪の地域社会を支える都市下層の構成員・職工であった。

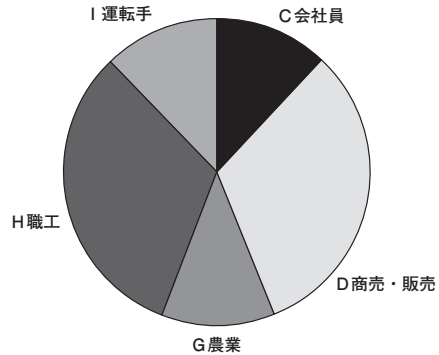
大阪に対して京都市内からの遊客は 25 名でその職業は、〔表 8〕の通り、職工と販売業がともに 32% である。H の職工には、鉄工所の他に大阪では見られなかった友禅などの染物職人が含

まれ、また販売業 8 人中呉服商が 5 人と京都の産業の特徴を示している。次いで農業・会社員・運転手がそれぞれ 12% で、京都の客は職工だけに偏っていない。

〔表 8〕京都市内職業別割合

職業分類	客数	割合
A 管理職	0	0%
B 専門職・技術職	0	0%
C 会社員	3	12%
D 商売・販売	8	32%
E サービス業	0	0%
F 警察・軍人	0	0%
G 農業	3	12%
H 職工	8	32%
I 運転手	3	12%
J 建設従事者	0	0%
K 運搬輸送	0	0%
その他	0	0%
合計	25	

京都市内職業別割合



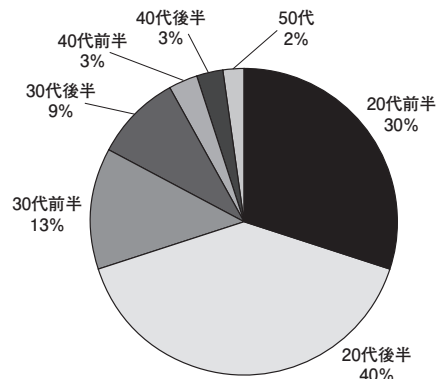
(4) 遊客の年齢構成

遊客全体の年齢層は〔表 9〕である。もっとも若年は 20 歳、最高齢が 58 歳で、平均年齢は

〔表 9〕年代別遊客数

客の年齢	人数
20代前半	353
20代後半	967
30代前半	155
30代後半	197
40代前半	33
40代後半	40
50代	21
計	1766

年代別遊客数



27.8 歳である。20 代前半が 30%、後半が 40% で、全体の 7 割となり、京都の遊廓と比較すると大正 10 年の七条新地 S 家の娼妓型の遊客年齢別構成に近い⁽¹⁷⁾。宮川町の客は、20 代前半が 9%、20 代後半が 23%、30 代が 45% で、40 代前・後半がそれぞれ 10% 前後と一定の客数があり、平均年齢も 32.2 才で高い⁽¹⁸⁾。橋本の遊客は、経験知の少ない若年で、おそらく独身者層が多く、偏りが顕著である。芸者型の祇園甲部に近い宮川町とは、明らかに客層の違いを示している。

(5) 大阪・京都の遊所の花代

大阪市内には川口居留地に付属する施設として明治初年に居留地付の新地として開拓された松島遊廓があり、大正頃から発展した飛田遊廓もある。港区・此花区・浪速区・大正区からの客は、大阪市内でも隣の西区の松島遊廓ではなく、わざわざどうして橋本まで足を伸ばしたのであろうか。

京都には店持ちの旦那衆・経営者が散財する祇園甲部・乙部のように、芸妓の割合が高く、客ひとりあたりの消費金額の高い遊所もあれば、1軒当たり多くの娼妓を抱えるが、客一人当たりの消費額が少額の七条新地や五番町等、客層・消費額や芸妓と娼妓の割合など遊廓によりそれぞれ類型がある⁽¹⁹⁾。近くには伏見の中書島・撞木町などの遊廓もある。

昭和5年刊行『全国遊廓案内』から各地の花代・宿泊代の目安を〔表10〕にまとめた。近年めきめきと繁昌しているという橋本遊廓は、1時間当たりの花代は1円でもっと安価である。各地の遊廓を比較することは難しいが、宿泊せずに1時間の花代だけで済ませるならば、昭和になると飛田や松島、枚方よりも低価格が橋本であった。

〔表10〕大阪・京都遊廓花代比較

	遊廓	料金の目安
京都	島原	1時間1円50銭から太夫で1泊30円
	祇園遊廓	1時間2円、1時間ごとに1円増し
	宮川町	朝から昼迄3円、昼から暮迄3円50銭、暮から12時まで4円50銭
	伏見撞木町	1時間1円50銭、外遊税等込みで1円70銭で1時間遊べる
	伏見中書島	1時間2円、夜半は4円、全夜は6、7円、税は消費額の1割2分
	橋本	1時間1円、1泊5.6円。芸妓は1時間1円50銭
大阪	堀江遊廓	最低でも2円80銭、午前2時以後は4、5円で泊まれる
	新町遊廓	1時間2円80銭、1泊10円
	飛田遊廓	1時間1円50銭、午後6時から12時迄5円25銭、引けから翌朝6時迄4円95銭、6時から正午迄2円70銭、正午から6時迄4円50銭。：芸妓を呼ぶと1時間90銭
	松島遊郭	1時間1円50銭、午前6時から正午まで2円70銭、正午から午後6時迄4円50銭6時から夜目12時迄5円25銭、12時から翌朝6時迄5円
	枚方遊廓	1時間1円50銭朝から昼迄1円35銭、昼から暮迄2円40銭、暮から10時迄3円、10時から12時迄1円50銭、12時から翌朝まで2円10銭

さらに言えば、大阪から京都方面へ足を延ばすには、京都観光や石清水八幡宮参詣という理由付けは容易である。最下層の労働者は、伏見の中書島や墨染にも遊所はあるが、より近距離で安価な橋本を選択したといえる。

遊客について分析してきたが、次に娼妓の勤務形態を見よう。

(6) 娼妓の労働状況

遊客帳の昭和15年1月・2月に毎日娼妓がとった客数と客の消費額、つまり娼妓が稼いだ金額を〔表11〕にまとめた。正月朔日は休業で、2日から5日までは盛況で20人から28人の客を5人の娼妓が接客している。

正月5日福丸は8人の客をとっている。福丸の一日をみると、朝9時半から正午まで、15時

〔表11〕昭和15年1月・2月娼妓別接客人数・稼ぎ金

1月	市奴	玉勇	可祝	福丸	美津葉	計	2月	市奴	玉勇	可祝	福丸	美津葉	計
2日	4	6	4	7	7	28	2日	2	4	3	2	1	12
3日	5	5	5	4	1	20	3日	2	3	4	4	2	15
4日	7	6	6	3	5	27	4日	6	2	3	3	3	17
5日	5	5	3	8	4	25	5日	2	1	3	2	4	12
6日	4	3	4	3	2	16	6日	4	3	3	2	2	14
7日	2	3	2	1	1	9	7日	2	2	2	2	2	10
8日	2	1	1	1	4	9	8日	3	2	2	2	2	11
9日	1	3	2	—	2	8	9日	1	1	2	2	1	7
10日	—	3	2	4	3	12	10日	2	2	2	3	2	11
11日	1	2	2	3	3	11	11日	3	3	6	4	5	21
12日	—	—	3	1	1	5	12日	3	1	5	4	4	17
13日	—	—	2	1	1	4	13日	1	1	1	1	1	5
14日	—	4	2	2	3	11	14日	2	3	3	1	2	11
15日	—	—	4	3	5	12	15日	2	1	3	2	3	11
16日	—	—	4	3	3	10	16日	4	3	3	3	2	15
17日	—	—	2	2	2	6	17日	5	4	2	1	3	15
18日	—	—	3	3	4	10	18日	1	2	1	1	2	7
19日	—	—	2	3	2	7	19日	2	2	2	2	1	9
20日	—	—	2	3	2	7	20日	2	1	—	1	1	5
21日	—	—	4	4	5	13	21日	3	—	2	3	2	10
22日	—	—	1	1	1	3	22日	2	—	2	1	2	7
23日	—	—	3	2	2	7	23日	2	—	2	2	2	8
24日	1	1	2	1	1	6	24日	2	—	2	1	1	6
25日	—	3	3	3	2	11	25日	2	—	2	2	3	9
26日	—	2	1	1	3	7	26日	1	—	1	1	—	3
27日	—	1	2	1	5	9	27日	1	—	3	2	—	6
28日	—	2	3	4	2	11	28日	2	—	4	6	—	12
29日	—	2	1	3	2	8	29日	3	—	3	3	—	9
30日	—	3	2	3	—	8	接客合計人数	67	41	71	63	53	295
31日	1	1	2	2	3	9	稼額合計(円)	277.5	170	289.4	271.3	270	1278.2
接客合計人数	33	56	79	80	81	329							
稼額合計(円)	147.2	226	339.4	319.5	397	1432.6							

から16時、16時45分から18時、18時10分から19時、19時から、20時20分から、22時30分から23時30分、0時40分から翌朝8時まで泊り客合わせて8人である。正午から15時までの3時間休憩しただけで、翌朝まで接客している。1時間にも満たない50分の客もある。正月2日に7人の客をとった美津葉は、12時50分から14時20分、16時から17時20分、17時半から19時、19時から20時、20時から22時、22時50分から1時間、深夜0時から翌朝8時まで、合計7人である。1時間から2時間の客を深夜まで6人とり、泊り客で翌朝を迎える。

この遊客帳の登・下楼時間の欄には、記載漏れがかなりあり、大まかな数字ではあるが、1 時間の客が 270 人、2 時間未満が 118 人、1 時間未満の客は 42 人で、2 時間までの短時間滞在客は 430 人、全体の 4 割近くになろうか。可祝・福丸・美津葉は 1 ケ月に 79 人から 81 人に人を接客し、一日平均 2.6 人から 2.7 人で、複数の客をとるのは常である。

市奴・玉勇は、客をとらない日が続いており、病気で休業している。それでも玉勇が働いた日数 19 日でその間 56 人を接客し、一日平均 2.9 人、市奴は 12 日間で 33 人、平均 2.8 人である。休業を取り戻すように一日に多くの客をとる傾向にある。

2 月に入り客足は若干落ち着いたように見えるが、客の多い時はひとりで 5、6 人を接客する日もある。美津葉は、2 月 26 日で廃業し、2 月 21 日から休んでいる玉勇は、3 月 14 日まで休業、おそらく入院治療であろう。

大正 13 年 11 月から 14 年 4 月まで七条新地 S 家の娼妓⁽²⁰⁾と比較すると、最も客の多い 1 月で娼妓一人当たり 26 人から 37 人、5 人の娼妓あわせてひと月 159 人の客であった。橋本は同じ 5 人の娼妓で、ひと月に 328 人と倍以上の接客数である。安価な花代であっても数多くの客で補う、限界まで接客する娼妓の極めて過酷な勤務状況は、病気の常態化を生んでいた。

第二友栄楼の売上額は、正月 1 ケ月は 1432 円 60 銭、2 月は 1278 円 20 銭である。正月は朔日以外ほとんど休みなく働いた可祝は 339 円 40 銭、福丸は 319 円 50 銭、美津葉は 397 円の売り上げである。2 月に客足は落ち着き、可祝は 71 人の客で 289 円 40 銭、10 日程休業した玉勇は 41 人の客で 170 円の売り上げである。No.15〔娼妓別売上・借金等稼業帳〕で見たように昭和 12 年 2 月玉勇が受け取った稼ぎは 5 円 20 銭となっている。花代に賞与や化粧品が加えられ、労をねぎらって賞与が付加されているが、実際に客が支払った額とはかけ離れている⁽²¹⁾。娼妓が搾取される仕組みがここにある。

3. 家計日誌と遊廓経営

(1) 楼主による娼妓発掘の記録

昭和 10 年の家計日記から楼主が新しい娼妓をスカウトする様子を見ておこう。

昭和 10 年 1 月 14 日晩にさたか・さたけ（佐竹か）という紹介業者が妓女（共）と親を連れてくる。翌日手元にあった 400 円を親に渡し、紹介料 110 円を 10 円増しで紹介業者に渡す。同月 16 日業者は警察へ手続きに行き、17 日に親は帰る。1 月 26 日市奴は警察の認可があり、翌 27 日に市奴の親元へ 480 円を送金する。遊客帳 No.1 で接客していた市奴は、昭和 10 年 1 月に娼妓となったことがわかる。

5 月 2 日に紹介業者から電報があり、翌日 3 日昼過ぎに大牟田へ到着、小牟田・宮崎で見定めて、宮崎で娼妓一人を契約し、650 円を親に渡す。翌日は宮崎の青島を見物し、もう一人を見定めに行くが、「だめ」と記す。5 月 6 日熊本へ出て二本木の遊廓の太夫道中を見て、7 日に水前寺の博覧会を見学、本妙寺を参詣して午後の夜行列車で帰途、8 日朝に大阪梅田に着き松島へ電話して自動車で橋本へ帰っている。

次に 11 月は長期滞在して新しい娼妓を迎えるため奔走している様子が記されている。(句読点は筆者による)

- 11月20日 熊本へ行く、10時7分のさくらで幸栄ろ(楼)の姉様と一所に、幸栄ろは下関へ行く
- 11月21日 午後1時45分に熊本へ着く。吉田屋行く。晩に二人見る。二本木の仕替物(者)
- 11月22日 ひる二人を身体に行く。一人わ(は)子宮が悪い。身体検査代2円
- 11月23日 天草の妓供(共)を立金して身体に行く、取る。市奴晩に新市街へ萬歳に行く。宿へかへたら、幸栄ろの姉様が来てた。朝7時30分に打に行く
- 11月24日 あんまして宿に居てたら、幸栄ろの姉様が7時頃に来る。二人で二本木へ見に行く。新市街へ活動を見る
- 11月25日 午前2時47分の汽車で下関へ幸栄ろが行く。御前12時2分の汽車で阿蘇へ行く。かへり2時20分の自動車で坊中まで来る。4時6分の汽車で熊本へかへる。熊本へ5時30分に着く
- 11月26日 今日かへるつもりが親が書類をせぬので、松島の親出を身体に行く。先がないので松島へ電話をかける、やはりだめ、かわりに宅の奴供をまわす
- 11月27日 松島の方の妓供親が書類を以て(持って)来る。立金に行く、800円渡す。家の妓供の立金850円渡す。午後5時15分の急行で佐竹の妓供と5人連れ帰る
- 11月28日 午前7時55分に梅田へ着く、〇〇と〇ちゃんが向(迎)ひに来て奴供を3人渡す。自動車で家までかへる、自動車賃3円
- 11月29日 向ひから700円借りて八幡から1300円出して、都合2000円にして熊本へ以て行く。300円持ってかへって向ひへ300円返す

11月20日、同じ橋本の向かいの筋にある幸栄楼の楼主とともに出かけ、友栄楼は熊本へ向かい、幸栄楼は下関へ、翌21日午後に到着、その夜に熊本で2人を見て、翌日22日に身体検査に同行し、一人は子宮が悪いことがわかる。23日天草で身体検査代金2円を立て替えて、採用することになっている。この日の晩に市奴と萬歳を楽しんでおり、市奴は12月から橋本で働くが、同じ人物ならば、顔見知りか熊本の遊廓からの移籍であったか。24日は幸栄楼が宿に来て熊本二本木の遊廓へ行く。熊本二本木遊廓から移籍する娼妓を接見するためであろう。25日幸栄楼は下関へ立ち、午前の汽車で阿蘇へ行き、自動車で観光して、夕方熊本へ戻る。26日大阪へ帰るつもりが、親が書類を書かないので、姉が経営する松島遊廓の本家に送るつमりの親出(親元から出で初めて娼妓になる者)を身体検査に行く。松島へ電話するが、「やはりだめ」は、親が娼妓に出すことを承認しなかったのか、そのかわりに友栄楼で働かせるつमりの娼妓を松島へまわす。27日には契約金をそれぞれに渡し松島本家と橋本も合わせて5人を連れ帰る。28日朝に梅田に着き、3人を大阪へ渡し、橋本の自宅へ車で帰る。翌日は熊本へ送金など娼妓の立金整理をしている。

友栄楼の三女は、1週間以上も熊本に滞在し、松島本家から委託された人数も含め、娼妓を集め、身体検査や書類などを取りまとめて、連れ帰っている。紹介業者との交渉や親と本人への説得、本人との接見で適正の見定め等は、遊廓を熟知した経験が活かされた。複雑な事情を抱え立場や家庭環境の違う相手には、女性ならではの説得や気遣いがあったろう。『橋本遊廓沿革誌』には85軒の貸座敷経営者の名があげられるが、その内48軒が女性経営者であった。旅の合間には名所や観光地の見物もしながら、同じ遊廓経営者とも連れだって、活動写真や萬歳を楽しんでいる。経営者の見識と経済的な余裕が見られる。

（2）娼妓の入退院と慰安

橋本の性病予防については、遊廓が認可された明治20年に、第二友栄楼の北となり中ノ町20番地に貸座敷組合の事務所が設置され、そこに検査所があてられ、壁に「VD」の文字が書かれていたという。昭和4年検査場狭隘により事務所とともに歌舞練場へ移転した。伏見の西柳町に伏見娼妓検査所があり、伏見中書島や橋本等南部の性病患者が入院した⁽²²⁾。

昭和3年11月中書島・撞木町・橋本の三遊廓組合が伏見娼妓検査所を相手に知事に陳情した⁽²³⁾。橋本・中書島の入院の娼妓6名が楼主の元へ逃げ帰り、粗末な食事に日中は端座して横臥を禁じ歩行困難になるなどの虐待を訴えた。検査所側を代弁した宿直者は、差し入れを禁じるのは、間食は余病を招く恐れがあり、入院者に横臥させないのは、娼妓がふしだらであると。また訴える楼主に対して、所詮金のかかった女を逃亡させないか高堀でも建てさせる監禁を目的の訴えだと。検査所長は不在のままで、入院者の治療方法・待遇改善の意思は示されていない。この顛末を知る資料はないが、娼妓と楼主双方に対する蔑視感があらわれている。記事は抱え娼妓のために陳情した遊廓楼主の美談のようであるが、三遊廓組合の委員の名は伏され、逃亡した娼妓の所属楼・実名・年齢を載せている。娼妓が矢面に立たされる当時の一般の見方や新聞報道のあり方が見て取れる。

昭和11年の家計日誌にある、娼妓の入退院の記載を書き出してみる。美津葉は4月13日に入院し同24日退院。玉勇は4月28日入院、5月6日退院、6月29日にも入院している。7月7日に外科の永原医院に入院し同月11日に連れて帰る。八千代は6月29日に入院、8月14日に退院。笑勇は8月28日入院、10月24日伏見の病院へつれて行く。福丸は10月7日に入院し、11月17日退院。愛子は9月3日に登録して初店の新入りで、10月7日入院、同16日に退院。市奴は12月14日に入院、翌年正月15日に退院。

この年第二友栄楼が抱える娼妓は7人で、毎月娼妓の誰かが入院し、一年に何度も入退院を繰り返している者もある。入院に至らずとも体調不良で客をとれず、数日休業する娼妓もある。娼妓の過酷な労働状況が招いた当然の結果ではある。

日誌には性病治療のほかに、娼妓を連れて川向こうの高槻や大山崎へ鍼や灸の治療を受けさせている。娼妓の病氣予防や健康管理は遊廓経営の一環ではある。時には芝居や枚方の菊人形見物などに娼妓たちを連れて行くこともあり、娼妓と同様に忌避される稼業の雇用者としての配慮や

情愛を示すこともあった。第二友栄楼を継いだ楼主は、薬剤師免許取得の翌年には、風邪薬や喘息薬を調剤し京都府へ売薬申請している。薬学の知識は、遊廓経営に活用されたのであろうか。経済的優位者がその環境によって備わった知識や教養は、性産業に対する倫理観・道徳観とどのような折り合いをつけていたのであろうか。

日誌には、第三者に店の勘定を依頼する記述がある。遊廓の楼主には文字が書けない者もあり、人を雇用して「帳場」を任せていたという。教育で遊廓経営以外の職業・経済力を娘に望んだ楼主の心情・葛藤であろうか。

おわりに

橋本は、明治元年に戊辰役の戦場となり街並みは焼亡し大きな被害をうけた。明治維新後は、町の復興策のひとつとして、明治20年に橋本は遊廓として京都府の認可を受ける。明治以前橋本は、石清水八幡宮のある男山の西山麓、京・大坂を結ぶ街道筋にあり、八幡宮参詣の拠点のひとつとして、また宿場ではないものの、八幡宮参詣者に限って宿泊は許される合宿（あいのしゆく）として賑やかな場所であった。渡し船により対岸の大山崎とも往来が盛んであり、もともと橋本は行基の山崎橋架橋の地として古くから人が交錯する由緒ある地として知られていた。京阪電車開通により、淀川と男山を望む風光明媚な観光地、芸妓と娼妓が混在する遊所として橋本の復興が期待された。

明治後期には大阪の大手鉄工会社などで技術を習得した職工が中小工場を設立し、第一次大戦の好景気を経て、次第に鉄工・機械・紡績等の分業体制を組織して関連業種の中小工場が集積し、輸出品を担うまで発展していた。日中戦争の長期化により軍国化・統制経済へと傾斜する中で、大阪の産業構造を支えた下層の若年工場労働者が最も安価な橋本遊廓の主な客であった。安い花代を補うため極限まで多くの客をとる娼妓は、入退院を繰り返す劣悪な労働状況であった。芸妓が歌や踊りでもてなす、ゆったりとした時と経済的な余裕がもたらす非日常の遊所ではなく、性売買に特化し、より効率化を遂げた遊廓として変貌していった。横田氏がいう性産業の最下層化、大衆化の極地があった。それには娼妓の大きな負担と犠牲があり、娼妓の稼金と手元に渡される金額の相違は、近代公娼制度下で娼妓を納税主体として把握、統制された⁽²⁴⁾としても、あまりに苛烈な搾取であった。

京都では大正期から金融恐慌までの時期に遊客が増大したが、そこには娼妓型遊廓の拡大があった。橋本遊廓の変貌もほぼ同時期と捉えられる。橋本遊廓の友栄楼は、大阪松島遊廓から姉妹が進出して経営していた。橋本遊廓の女性経営者は、人材の適性を見極め、交渉術などの能力を備えていたが、「女商売」と世間に肯定されない性産業で活用されていたことが、女性の労働の場のあり方を示している。

友栄楼2階に設置された産児調節・性病予防サック自販機の紹介にとどまり、娼妓の性病検査と予防の知識、治療法などには言及できなかった。また昭和19年から終戦直後までの遊客帳や、中書島などの近隣遊廓との比較を今後の課題としたい。

【注】

- (1) 「全国遊廓案内」1930年7月（『近代庶民生活誌』14色街・遊廓Ⅱ、三一書房、1993年）。
明田鉄男『日本花街史』、雄山閣出版、1990年
- (2) 八幡市『八幡市誌』第3巻、214～218頁、1984年3月。守屋敬彦「近代京都府八幡市の住民生活」（Ⅲ）（『道都大学紀要』教養部）第6号、1987年
- (3) 京都府教育委員会『京都府の近代和風建築：京都府近代和風建築総合調査報告書』2009年
- (4) 拙稿「橋本遊郭保存の活動と政倉莉佳所蔵資料調査」（『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号、2021年3月）
- (5) 横田冬彦「娼妓と遊客—近代京都の遊郭—」（京都橘女子大学女性歴史文化研究所編『京都の女性史』2002年）。瀧本哲也「戦間期における京都花街の経済史的考察」（『人文学報』115号、2020年6月）<https://doi.org/10.14989/252823>
- (6) 高木博志「金光教と遊廓・花街—都市布教と民衆—」（金光教学—金光教教学研究所紀要No.58、2018年）
- (7) 「大正期京都における「遊客」の属性とその空間的特性：『遊客人名帳』を用いた宮川町の事例分析」2008年度日本地理学会春季画術大会発表要旨
- (8) 人見佐知子「遊廓と遊女—芸娼妓解放令を中心に—」（総合女性史学会『ジェンダー分析で学ぶ女性史入門』岩波書店、2021年3月）
- (9) これまで橋本遊廓では上棟の御幣により昭和6・7・10年のそれぞれの建物の年代は知られているが、大工名は初出である。なお土地は橋本の旧家の所有地であったが、明治32年地上権が第三者に設定され、茶屋や貸座敷を建てるなどの活用が委ねられた。第二友栄楼主の元夫が建てたと伝え、元夫は楼主と離別後に岡山に帰郷し材木商で成功したという。その後昭和11年に第二友栄楼が土地建物を購入するまで、借家で遊廓経営していた。家族構成や不動産関係資料は第二友栄楼のご子息に提供いただいた。ご協力に衷心より謝意を表す。
- (10) 石原傳四郎『橋本遊廓沿革誌』1937年
- (11) 八幡市教育委員会『男山で学ぶ人と森の歴史』歴史編、2005年3月
- (12) 前掲（2）
- (13) 総務省「日本標準職業分類」2009年12月統計基準設定「1.大分類項目表」
https://www.soumu.go.jp/main_content/000394337.pdf
- (14) 枚方市『枚方市史』第4巻、1980年。『枚方市史』別巻、1985年
- (15) 佐賀朝『近代大阪の都市社会構造』日本経済評論社2007年12月。新修大阪市史編纂委員会『新修大阪市史』第6巻・第7巻、1988年
- (16) 黄完晟『日本都市中小工業史』臨川書店、1992年2月
- (17) 前掲（5）、横田111頁、大正10年七条新地S家の遊客は、20代が69%、30代が22%である。
- (18) 前掲（7）

- (19) 前掲 (5)
- (20) 前掲 (5)、横田 105 頁表 3
- (21) 前掲 (2)、守屋 16 頁、表 1「橋本遊廓揚り高」によると、芸妓 25%、娼妓 22%が楼主によって搾取され、実際は前借金の返済や衣装代・客の肩代わり代などが差引かれるとあるが、本資料では花代の算定基準が相当低く抑えられている。月に数百円の売上げに対して、手元には数円である。娼妓に提示する稼ぎ高と統計上の基準がかけ離れている。
- (22) 前掲 (2)、明治 22 年 9 月 22 日・同 24 年 7 月 2 日京都日出新聞
- (23) 昭和 3 年 11 月 19 日京都日出新聞
- (24) 人見佐知子『近代公娼制度の社会史的研究』日本経済評論社、2015 年。118 頁～明治初年大阪府で官許の遊女に個別納税・営業主体としながらも次第に茶屋や遊所仲間で空間的にも統制が進むとあり、昭和の橋本での貸座敷組合による管理統制は、統一の書式によってある程度なされていたと推測できる。

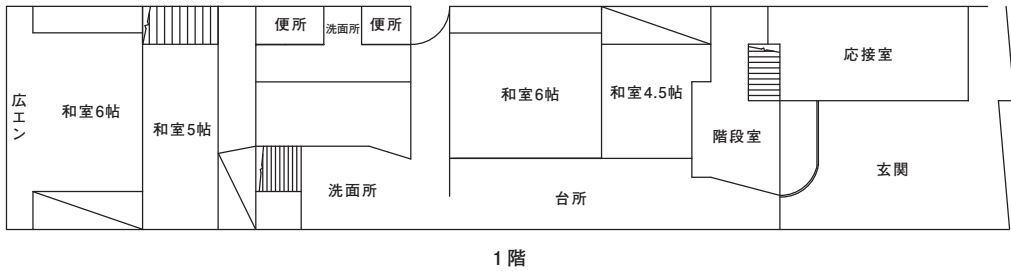
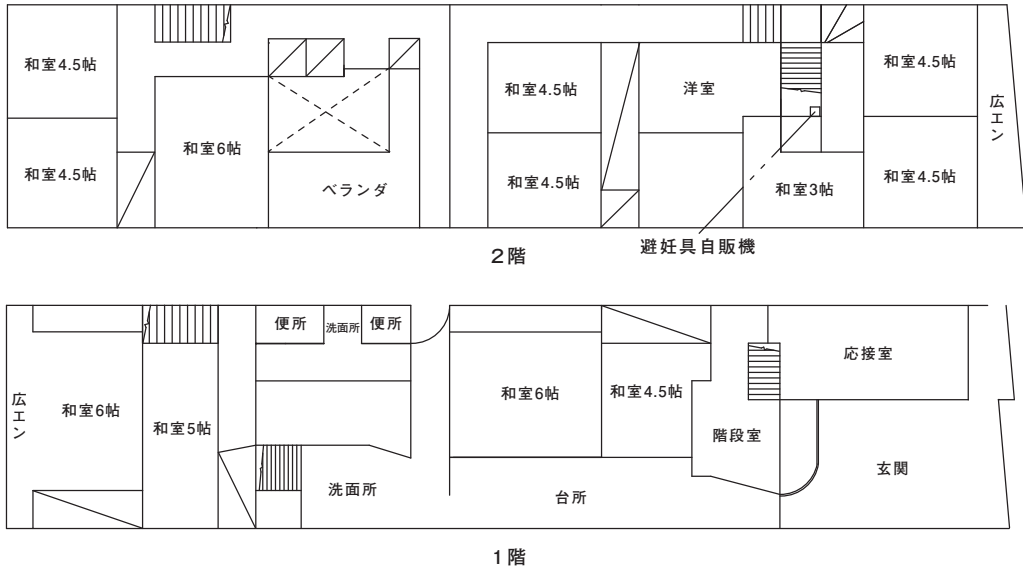
資料閲覧に協力いただいた政倉莉佳氏、橋本遊廓の貴重な話者奥西房子氏・田村敬次氏・和田利正氏、京都大学人文科学研究所高木博志氏、京都文化博物館学芸員植田彩芳子氏。資料整理は京都府立大学文学部大学院生芝野有純・安江範泰、遊客帳データ入力等は 3 回生高橋日向をはじめ北原美咲・幸川玲・藤村昂輝・前田愛佳・松本楓歌の諸氏による。現地調査と図版第二友栄楼見取図作成は芝野有純がたった。ここには記せなかった多くの方に末筆ながら、衷心より謝意を表したい。

追記 なお本稿は 2020 ～ 21 年度 JSPS 科研費 20K20503「社会転換期における地域アーカイブズ全国調査の検証と新たな方法の開拓」(研究代表者渡辺浩一) の調査成果の一部である。

(2021 年 9 月 29 日受理)

(たけなか ゆりよ 文学部歴史学科)

図版 第二友栄楼見取図



〔資料〕【産児調節・性病予防サック自動販売機】

十銭白銅貨は、大正九年（一九二〇）から昭和七年（一九三二）発行



（正面）「□□□□ 下ノボタンヲ押テ下サイ
（朱書）産児調節／性病予防
サック自動販売機」
（代金投入板）「十銭白銅／入口／NO40800」
（左側面）「貴下ノ衛生 保健ノ為ニ」
（右側面）「十銭デ最高級スキん」
（上部）「アルマスキん」

〔表 1〕 政倉莉佳所蔵資料目録

No.	原題	年号	西暦	月日	備 考
1	遊客帳	昭和14年	1939	12月26日	昭和 15 年 4 月 19 日まで記載。表紙の表・裏、前後数枚欠損。帳外れ 2 枚
2	遊客帳	昭和19年	1944	4月27日	昭和 19 年 10 月 7 日まで記載
3	遊客帳	昭和19年	1944	10月7日	昭和 20 年 4 月 8 日まで記載
4	遊客帳	昭和20年	1945	4月8日	昭和 20 年 10 月 5 日まで記載
5	外人遊客帳	昭和20年	1945	10月26日	表紙はずれ、12 月 3 日までの 5 丁記載
6	家計日誌	昭和10年	1935		
7	家計日誌	昭和11年	1936		
8	家計日誌	昭和12年	1937		
9	家計日誌	昭和13年	1938		
10	家計日誌	昭和14年	1939		
11	従業員名簿	-	-		昭和 25・26 年 9 名の就業年月日等を記録
12	台物控	昭和14年	1939		昭和 16 年まで記載
13	〔各娼妓売上帳〕	-	-	6月11日	表紙欠失。5 名の娼妓、8 月 15 日まで記載
14	〔遊客宛て領収書控帳〕	(昭和12)	1937	4月23日	昭和 16 年 5 月 12 日まで記載
15	〔娼妓別売上・借金等稼業帳〕	昭和10年	1935		表紙欠損、昭和 10 年 12 月 5 日登録、稼業 4 年 6 ケ月、前借金 800 円、昭和 13 年 6 月 5 日まで記載
16	〔娼妓別売上・借金等稼業帳〕	昭和11年	1936		表紙欠損、昭和 11 年 10/8 入所、11/16 退所
17	〔娼妓別売上・借金等稼業帳〕	昭和13年	1937		表紙欠損、昭和 13 年 6/16 ～同 14 年 5 月記載あり
18	〔娼妓別売上・借金等稼業帳〕	昭和14年	1939		表紙欠損、昭和 14 年 9/5 ～同 15 年 12 月
19	〔娼妓別売上・借金等稼業帳〕	昭和15年	1940		表紙・前半欠損
20	〔娼妓別売上・借金等稼業帳〕	昭和15年	1940		表紙欠損、昭和 16 年 6 月まで記載あり
21	〔娼妓別売上・借金等稼業帳〕	昭和16年	1941		表紙欠損